

MMQCとは「もっと儲かる業務改善」で「業務改善は、人づくり、品質づくり」を実践する着実・前向き・具体的な活動です。

「忍」に学ぶ

右掲は、故大鵬さんが北海道庁に「忍」という直筆の書を贈った写真です。大鵬さんは5才の時に樺太で終戦を迎え、ソ連軍が迫る中、母子が最後の引き揚げ船で小樽へ帰る時に母が体調を崩して稚内で下船したが、その船は小樽への途中でソ連の潜水艦魚雷で沈没されたので強運にもその難を逃れたとの事です。



母子家庭だったので貧しい生活だったが、16才の時、叔父に連れられ、巡業に来ていた二所ノ関部屋に行き入門したのです。大鵬さんの素質を見抜いた親方は相撲界独特の「かわいがり」で鍛え上げたのです。「かわいがり」と言っても「しごき」同様な苦痛がある訳です。それに耐えて実力をつけて行く訳です。「けいこ」と「ちゃんこ」で「技」と「体」をつくり、それに耐え抜く精神力で「心」を磨いたのです。よく「心技体」と言いますが、「技」と「体」があって「心」という事が分かります。

大鵬さんは「忍」という言葉が好んで書かれており「信条」にされていました。「忍は心の上に刀と書く」と大鵬さんの「忍」という「信条」の厳しさを話されているのです。しかし、大鵬部屋を娘婿の大嶽親方に譲るときに、直筆の「夢」の字を贈ったのです。時代は「忍」を求めても、若者がついて来ない実状に合わせたのです。しかし、真の「夢」を追い求めるには影の努力が大切という事は、どんな世界でも共通しているのです。

スポーツの世界では「練習はウソをつかない」と言えます。練習には「忍」が必要なのですが、超一流は飛びぬけて練習に耐えられるのです。「千本ノック」とか言いますが、トコトン鍛え上げるノックは「しごき」とも映るくら

「技」と「体」が磨かれて「心」が磨かれる

いのです。それに耐えられる「心技体」があってスター選手への道が拓かれるのです。私の世代では王さんや長嶋さんを例に出しますが、宿舎に帰っても素振り、長嶋さんは「ピューン」という音で松井選手を鍛え挙げたと言われるが、なかなか妥協しない感覚を追い求める「心」が「技」と「体」を磨くのです。

我々、一般人も同じだと思います。たまに幸運でうまく行くことがあるかも知れませんが、それでは真の「オーラ」が身体から出て来ないのです。やはり、いろんな「壁」を乗り越えた自信が「折れない心」を作り上げ、その経験から導き出されるルール化で人の指導に繋がって行くのです。よく「流儀」と言いますが、磨かれた「やり方」は一朝一夕では出来るものではなく、「守破離」という言葉があるように、最初は「先輩」に学び、それを真似て「コツ」をつかみ、その「コツ」を自分のものにして実践する中で、さらに、自分の工夫を加えて「破」となり、それを繰り返して「離」となるのです。時間がかかるのです。

「時間がかかる」≡「忍」とも言えます。故船井先生は「コツコツ、ジワジワ、イキイキ、タンタン」という言葉を教えて下さっています。何事もやり続けるとうまく行く時が来るのですが、それに満足して「イキイキ」ばかりしているのはダメで、また、「タンタン」としてやり続けることが大切と教えて下さっているのです。そういう意味では「夢」って、出来たと喜ぶ「夢」は束の間であり、「夢」とは永遠に追い続けるものと言えるのです。つまり、「人」+「夢」=「儂」となるように「人の夢は儂い」と噛みしめて、毎日を「忍」で過ごして行きたいと思えます。大鵬さんのように「心の上に刃があると書いて“忍”」と心得て少しはスティックに何事も磨いて精進して行きたいと思えます。

ワンポイント・アドバイス

今回はNHKの「あの人に会いたい」という番組で、偶然、大鵬さんの「忍」という言葉に出合ったのです。私を含めて、現在人に望まれる言葉が「忍」かも知れないです。我慢が出来ずに借金まみれになったり、親や子を殺したりするニュースが多くなりました。これらの深い事情は推し量れないですが、もう少し「忍」が出来れば、そういう重大な事件にならないと思えます。

